



# あなたの ライフスタイルに合った お薬の選び方

子どものために、わたしができること

—子育て中の方へ—



監修:天野 宏一 先生

埼玉医科大学総合医療センター リウマチ・膠原病内科 教授

医療機関名

XEL46J003B

ファイザー株式会社

2021年6月作成

# はじめに

関節リウマチは、長くつきあっていく病気です。

患者さんのなかには、リウマチの症状や病気の不便さにより何かをがまんしたり、あきらめてきた方もいらっしゃるかもしれません。



しかし、最近は医療の進歩により、関節リウマチの新しいお薬が増え、関節の痛みや腫れなどの症状がない「寛解」という状態まで症状をおさえることが可能となつてきました。なかには発症早期から適切な治療を行うことで、発症前と同様の生活を送ることができるようになつた患者さんもいらっしゃいます。



また、お薬の選択肢が増えたことで、「自分のライフスタイルに合ったお薬はどれか」という視点から、お薬を選択することが可能となつてきました。

—子どもたちのためにできることを精一杯したい—

そう考えて、積極的に治療に向きあつた患者さんのお話をご紹介します。

この本が、もう一度あなたに合つた治療を考え、主治医の先生といつしょに、これから治療を考えるきっかけとなれば幸いです。

イラスト：あべみちこ

## 詩織さんの選択

### 子どものために、わたしができること



#### 詩織さんのプロフィール

41歳。夫と子ども2人の4人家族。  
6年前に関節リウマチを発症。  
現在は自己注射のお薬で治療中。



リウマチを発症したのは6年前。  
長女を出産して間もなくでした。



自己注射による治療で症状も落ちつき、しばらく薬をお休みして無事に長男も生まれました。

出産後にお薬を再開。  
長男が保育園にあがるのを機に  
パートもはじめました。



おかげさまです！

職場の仲間にも  
恵まれ、子育てと両立しながら  
充実した毎日を過ごしています。



不安もあるけれど幸せな日々。  
ひろくん、おまたせ！

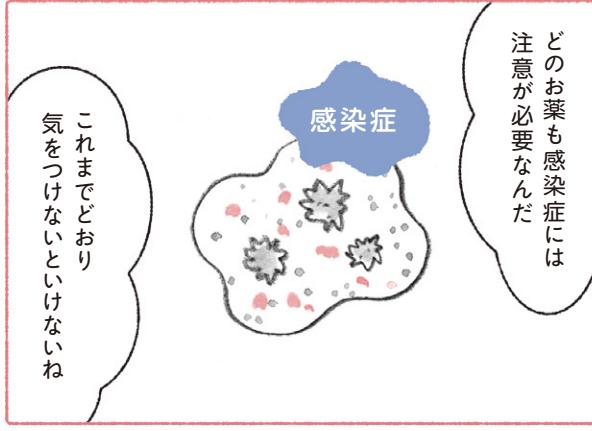


今日は自己注射の日だ。  
忘れないようにしないと。

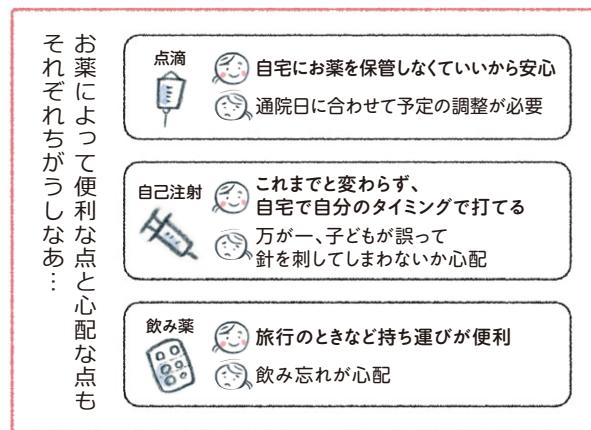


自己注射による治療で症状も  
落ちつき、しばらく薬をお休みして  
無事に長男も生まれました。

注射を打つのは、いつも子供たちが寝たあと。



患者の集まりに参加したり、仲よくなつた方に相談したりもしました。



それに点滴は先生や看護師さんにおまかせできるし、診察してからの投与だから、いろいろ安心です



**先生と相談しながら  
いつしよに決定することが大切です**

子育てをしながら、関節リウマチの治療を続けている詩織さん。治療中のお薬が効かなくなってきたため、主治医の先生から治療の変更を提案されました。

先生の話を聞いて、詩織さんは家族に相談したり、患者さんの集まりに参加するなどして、積極的にお薬のことを調べ、先生に自らの希望を伝えました。

このような治療へのかかわり方は、関節リウマチのように長くつきあつていく病気において、とても大切な姿勢です。

関節リウマチの治療は、①患者さんのケア、②薬物療法、③外科療法(手術)、④リハビリテーションの四本柱で成り立っています(図)。それぞれの領域は互いに関連しあっており、互いに連携をとりながら

薬物療法ですが、近年、「協働的意思決定(SDM)※」という考え方があり、関節リウマチの治療においても重要なといわれるようになっています。

SDMは、医師がお薬についてのエビデンス(科学的根拠)や処方経験などの情報を患者さんに説明し、それをもとに患者さんが医師と対等の立場でいつしょに考え、治療方針を決定していくことです。



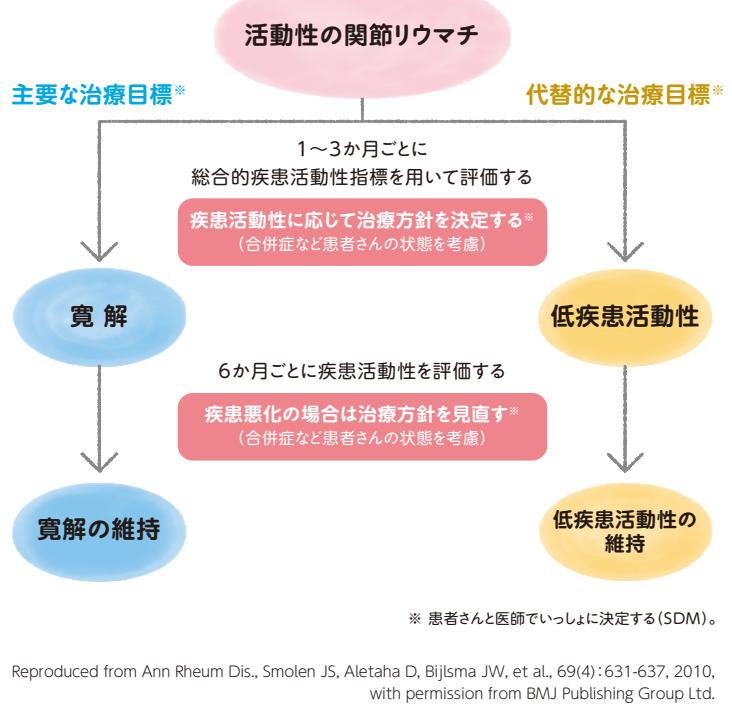
## 「寛解」を目標に計画的に行なっていきます

現在の関節リウマチ治療では、症状がほとんどない「寛解」という状態をめざすことが目標となります\*1。そのためには、定期的に治療の効果を確認しながら、計画的に治療を行なっていきます。これを「目標達成に向けた治療(T2T※2)」といいます。

T2Tにもとづいた治療を行なっていく際、治療中のお薬が十分に効かないかたり、または詩織さんのように、最初は効いていても途中から効きが悪くなってしまうこともあります。

そんなときは、治療方針を見直し、お薬の量を増やしたり、新たなお薬を追加・変更するといったように、治療を強化していきます(上図)。

### T2Tの考え方にもとづいた治療の手順



Reproduced from Ann Rheum Dis., Smolen JS, Aletaha D, Bijlsma JW, et al, 69(4):631-637, 2010, with permission from BMJ Publishing Group Ltd.

### 炎症の原因に働きかけるお薬の種類



\*1 長期にわたり関節リウマチを患っている患者さんなど、すぐに「寛解」をめざすことがむずかしい場合は、当面の目標として「低疾患活動性」という、寛解よりも少し基準を低くした状態をめざします。

ることで、関節リウマチの症状をおさえる効果があります。投与方法は、①点滴注射、②皮下注射、③経口(飲み薬)の3種類があります。お薬を選択する際、こうした観点と自身のライフスタイルを合わせて検討し、医師に自分の希望を伝えることも、前向きに治療に取り組むために大切な姿勢です。

### 関節リウマチの治療の4本柱

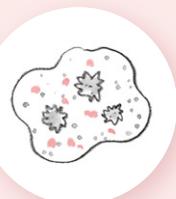


参考:遠藤 平仁:“19 治療の4本柱って何?” いきなり名医! 関節リウマチは治せる時代に 川合 真一編 1 日本医事新報社:78, 2009

\* SDM:Shared Decision Making(協働的意思決定)

そのためには、患者さん自身の希望や治療の目標を医師にきちんと伝え、お互いに理解しあいながら、信頼できるパートナーシップを築くことが大切です。

「無理せず続けられる自分にあった治療法を選びたい」「この先も自分らしい生活が送りたい」など、自身のライフスタイルや希望も合わせて検討し、医師に相談しながら決定していきましょう。



## 関節リウマチのお薬を服用中は、感染症に気をつけましょう

お子さんのこと、自身のライフスタイルや将来のことを考え、新たなお薬を選択した詩織さんですが、患者さんのなかには、副作用の心配から新たな治療にふみ出せない方もいらっしゃるようです。

詩織さんは、お薬について自分で積極的に調べ、きちんと理解した上で選択されたようです。

このように、お薬を変更する場合も、副作用を正しく理解することが大切です。  
関節リウマチのお薬の多くは、炎症をおさえる作用がある反面、体の免疫力を低下させることから、治療中はかぜをはじめとする感染症にかかりやすくなったりします。ふだんから予防を心がけ、体の調子がおかしいと感じたら、すぐに主治医の先生に連絡しましょう。



## 関節リウマチは、家族や周囲の方にサポートしてもらうことが大切です

### 感染予防のポイント<sup>1)</sup>

- ・「手洗い」を日常的に行い、食事の前やトイレの後の手洗いは念入りに。
- ・帰宅後など適宜「うがい」を行う。うがい薬がなくても水道水で十分。<sup>2)</sup>
- ・手ふき用のタオルはこまめに交換。
- ・インフルエンザの流行期には人ごみをさけるか、出かけるときはマスクをつける。
- ・インフルエンザワクチンや肺炎球菌ワクチン\*を接種する。
- ・お風呂場は、使用しないときには乾燥させる(病原体の繁殖を防ぐため)。
- ・ペットをさわったら必ず手を洗い、ペットと一緒に食事はさける。

\* 肺炎球菌ワクチンはワクチンにより接種可能な年齢が異なるため、主治医にご相談ください。



1)参考:矢野邦夫:抵抗力の低下している人を感染から守る本 第1版 ヴァンメディカル:102, 2012

2)監修:埼玉医科大学総合医療センター リウマチ・膠原病内科 教授 天野 宏一 先生

## ご家族や周囲の方による 関節リウマチ患者さんのサポート(例)

### 体や心に負担をかけない環境づくり

関節リウマチの症状には変化があり、体調や気候により、痛みの強い日や朝起きて体を動かすことができない日もあります。治療の中心はお薬ですが、安静にし、体や心に負担をかけない生活を送ることも治療の1つといえます。ふだんより痛みがつらかったり、だるいと感じたら、家事を手伝ってもらうなど、無理せず休める環境を整えましょう。

### 体調とお薬の管理を手伝ってもらう

かぜなどの感染症の予兆がある場合は、関節リウマチのお薬を中止した方がよい場合があります。とくに高齢の患者さんの場合は、家族にも注意してもらい、お薬の管理を手伝ってもらうとよいかかもしれません。お薬の副作用が疑われる場合は、すぐに受診しましょう。

### 受診につきそってもらい、いっしょに医師に相談

病気のことや治療について、わからないうことや心配な点があれば、受診につきそってもらい、いっしょに医師に相談することも家族の病気への理解を深めます。

### 公的支援の活用を

病気ことで困ったときは、医師、看護師のほか、ソーシャルワーカー、各自治体、ケアマネージャーなどにも相談し、公的支援の活用などについてもアドバイスを受けましょう。



関節リウマチ患者さんのなかには、家族や周囲の方に気をつかって、痛みがつらいことや手伝ってほしいことを言えず、かけまいと、病気についてほとんど口にしなかつたり、身近な家族にも治療法や治療費について相談するのをためらってしまうこともあります。一方で、家族や周囲の方も、病気のことがよくわからなかつたり、患者さんをどのようにサポートすればよいのか迷ってしまうこともあるかもしれません。

医師や看護師に相談するほか、ソーシャルワーカーなどにも相談し、患者さんや家族だけに大きな負担がかかることなく、安心して治療を続けていくよう、いっしょに考えていくましょう。